

下野國誌

十

				和
		三六四九	一	書
	一	二	一	門
一	二	一	一	
二				類
冊	架	函	號	

庫	文	閣	內	
三六四九	一	二	一	和
一	二	一	一	書
二				
冊	架	函	號	類

內閣文庫	
番號	和 36491
冊數	12 (10)
函號	267 92



下野國誌十之卷

内一〇九五八號

芳賀百姓越智直守弘識

古城盛衰

武茂城

那須郡武茂莊馬頭村小あて宇都宮常陸公泰宗始て築く正應永仁の年間なり

武茂系圖

宇都宮景綱三男

○泰宗

常陸公從五位下五郎左衛門尉母秋田城公藤原義景女初名盛宗法名蓮阿領武茂庄十餘郷

時景

美濃守從五位下法名蓮意母大官兵部丞平胤景女

景泰

遠江守從五位下母同上為京都守護住鳥丸

宗泰

三河守伊豫國住人

朝宗

三河守大洲城主宗都官
遠江守豐綱之祖

綱景

遠江守領都賀郡西方
十餘鄉西方氏之祖

綱泰

太郎左衛門尉實宗泰
二男

泰藤

左近將監法名蓮常母
芳賀伊賀守清原高貞女

忠泰

大久保五郎左衛門尉領武茂
庄大久保鄉三河國大久保氏祖

師泰

高尾明神社務母北条某
女

泰朝

三川安藝守上三川家督母同泰藤

氏泰

武茂右兵衛尉始領同郡狩野鄉号狩野將監後武茂家督母同上

泰景

大山田左京亮領同郡大
山田鄉母同上

氏朝

大山田美濃守母同姓三河
守宗泰女

綱定

八郎母上三川出羽守綱業
女從守都宮等綱赴奥州卒

綱胤

彈正少弼初名綱泰

綱親

上三川越中守上三川家督母同上

綱家

武茂右兵衛尉母守都宮基綱養女實常陸大掾平氏基女

泰長

四郎左衛門尉領常陸
國鳥子鄉

泰宗

鳥子四郎鳥子狩野寺之祖

女子

上三川出羽守綱業室綱
俊母

持

綱

宇都宮下野守宇都宮家督母色右京大夫源滿範女

賢

珍

老上司

太平記小宇都宮美濃將監泰藤同狩野將監氏泰宇都宮遠江守等往々小いゆ遠江守八景泰より其後孫ハ伊豫國大洲の城主宇都宮遠江守豐綱なり上の宇都宮系譜の末よ委し記しよりさて二男貞泰ハ宇都宮公綱の猶子と成て遠江守綱景と号し都賀郡西方三沢郷鶴岡の峯に住し其男綱泰ハ太郎左衛門尉と号し實ハ三河守宗泰の二男なり其男綱貞太郎左衛門尉其男綱朝太郎左衛門尉其男綱定徳威齋と号し其男太郎左衛門綱吉ハ天正のちめ上京して織田信長公に勤仕し信長公薨去の後ハ本國小立歸て芳賀郡赤羽郷を知行し其男太郎左衛門綱清ハ時慶長二年宇都宮一門没收の後ハ舊領西方郷小替居し其男太郎左衛門綱英ハ元禄年中松平右京大夫殿當國壬生の城主より刻召出され同八年上野國高崎小所替して寶永元年

六月十七日三十一歳少く病死し綱英女子一人ありて同藩遠藤六郎左衛門重吉小嫁して男子二人を生む其次男を以て西方代四郎景高と名のしを今も正徳四年十月廿六日廿一歳にて病死し今も故小断絶せり

西方太郎左衛門綱吉贈祖母井信濃守定久状

芳賀郡祖母ヶ井里長横堀氏所藏

右葉各村とて原二子極先之屋引等之儀
ゆはれ物事とて言ふはるは友事とて言ふ可
中へ生れし處大澤備前殿小念書た悉く
親吳人たりて作方如前と相抄りて事
不たおおとて状しめり
西方左衛門
文禄元年三月十日
祖母井信濃守定久

下野國誌十

此頃、西方太郎左衛門綱吉、芳賀郡赤羽小居住して、同所の上原二子塚と、祖母を井領の菅谷村と地替せし時の證文あり。西方長督記と云ふもの、元龜元年庚午二月、相摸の北条氏直、西方の城を責り、刻太郎左衛門綱吉の旗下、山田修理亮澄兼、三沢右馬助、廣重、越路若狹純一、同伊勢正信、阿久津大膳義雄、渡邊源左衛門道友、青木加賀利國、和賀井河内宗義、和久井太郎右衛門長忠、越路甚五兵衛同采女、渡邊將監、石川大學、中新井兵部、中島將監、藤平大學、山田藤右衛門、阿久津久左衛門、上田吉左衛門、若林彦右衛門、川島善九郎等、防戦ありしなり。

大山田鳥子狩野等も、永祿天正の頃、いそぐれども、其後、更し聞えん、美濃將監泰藤五代の後孫、大久保左衛門五郎忠茂、三河國小住して、松平和泉守長親君小従ひ、永正三年丙寅八月、今川氏親の將北条長氏と戦て、武功を顯し、三河記小いそいで、其家門の繁榮、世の知る所なれば、いそぐれども、いそぐれども、武茂の嫡流持綱、宇都宮の家督を續ぎ、其曾孫正綱の三男、兼綱再び武茂の家名を相續せて

重興武茂系圖

宇都宮正綱三男

○兼

綱

武茂右兵衛尉弥五郎母、佐竹掃部助源義親女

守

綱

左衛門尉母長倉遠江守源義尚女

豊

綱

右衛門尉母松野大膳亮、藤原綱喬女

方

綱

弥五郎

弥五郎方綱、元來佐竹家、屬して、今猶武茂弥五郎と号し、子孫連綿し、那須軍記、永祿十年丁卯二月十七日、佐竹義宣の下知として、武茂左衛門尉守綱、大山田彈正少弼綱胤、鳥子狩野、泰宗等、那須資胤を攻り、武茂北長臣、北条豊後守義興を、め、大桶安藝守、螺良織部正、飯塚伊賀守、星豊前守、薄井備中守、大金藤右衛門尉、露久保清左衛門尉、小川内膳正等、武名を顯し、いそぐれども、いそぐれども、

芳賀城

芳賀郡真岡よりあり、芳賀次郎大夫高親よりめく築く、文治年中、
て五行川の東岸より、と、天正五年真岡の臺に移り、

芳賀系圖

一品舎人親王九代後裔

瀧口藏人清原高澄七代嫡孫

○高親

芳賀次郎大夫建久九年
八月三日卒一本作朝重

高禎

芳賀太郎承元元年丁午
六月六日卒

高行

小太郎天福元年癸巳
十月九日卒

高明

大炊助曆仁元年戊戌三月
十七日卒

高俊

左兵衛尉永仁六年戊戌九月十三日卒、
法名雄山宗泰号養徳院

重廣

大膳亮仕那須頼資

重行

芳賀左衛門住那須郡
兼沢郷後孫在奥州

高直

伊賀守正安二年庚子三月廿二日卒、
法名英心道鉄号生天院

高房

肥後守四郎領同郡八木岡

高政

八木岡四郎實小栗孫次郎左衛
門尉重宗次男

高真

三河守五郎領同郡小宅
小宅并八幡社司東宮氏祖

高置

小宅藏人觀應二年卯十二月廿七
於駿州薩埴山討死

高久

左兵衛尉實、宇都宮景綱三男建武元年甲戌卒、
法名智山道惠号光明院

高名

從五位下左兵衛尉入道禪可越後守護職應安五年壬子十月晦日卒、
法名号松林院直山禪可八十二

富高

岡本信濃守觀應二年於
駿州薩埴山討死

正高

信濃守貞治二年八月廿六日於武
藏野討死

高貞

從五位下伊賀守彈正少弼兵庫助初名公貞實、
宇都宮貞綱長男歌入法名号本性院徹山道覺一本作貞高非也

新和歌集秋 清原高貞
芳賀高定之遺跡を賜ひて芳賀高定と名乗り相續け

高家 駿河守實高名長子
同郡飛山城主
高 清 駿河守移住氏家郷勝上

高朝 伊賀守八郎法名普天道照
成 高 右兵衛尉入道光阿法名純
叟道清

女子 武茂美濃守時景室泰藤及上三川泰朝大山田泰景寺之母

正 綱 宇都宮明綱家督称下野守
興 綱 芳賀高定後守都宮家督
称下野守

高 益 左兵衛尉法名忠翁道賢
景 高 左兵衛尉初名益親法名華
陰道春
高 盛 左衛門尉領同郡若色郷
若色清水寺之祖
景 秀 袋方式部少輔法名永存
住越後國袋方城

高 義 修理大夫永祿九年十月
朝 高 厚木美濃守属北条氏政住
厚木法名芳樹院觀山浄光

建 高 刑部大輔右馬允初名高孝
高 經 右兵衛尉初名高勝天文八己亥
八月生害法名天質道高
貞 清 芳賀惣領法名建好宗徹
重 季 玉生和泉守玉生雅樂助藤
原綱宗家督

高 照 芳賀次郎沙弥弘治元年乙卯三月生害法名芳宮道賀号高照院
那須修理大夫藤原資胤室資晴母

女子 玉生美濃守藤原高宗室

建高、高經等宇都宮尚綱朝臣、背之滅亡、依之益子勝宗の
三男十郎宗定其遺跡を賜ひて芳賀高定と名乗り相續け

高定

芳賀左衛門大夫實益子勝宗男天正十六年戊子正月四日卒六十八
法名雄台院機山道鑑

高繼

伊賀守十郎實高經三男高照舍弟法名直山道正

高武

左兵衛尉十郎實宇都宮廣綱三男慶長十七年壬子十月廿日卒四
士法名天徳院惠鑑道光

高成

十郎仕水戸家

東鑑よ文治五年己酉八月奥州泰衡追討の条よ宇都宮左衛門尉朝綱郎後紀權守波賀次郎大夫以下七人以安藤次為山案内者面々負甲足馬密々出御館自伊達郡藤田宿向會津之方越于土湯嵩鳥取越等懸登于大木戸上國衡後陣山發時聲飛前此間城中大騷動國衡以下邊將無益于構塞失力逃亡云紀權守波

賀次郎大夫等勲功事殊蒙御感之仰但不及賜所領被下旗二流被御可備子孫眉目之由云云とありて同承久三年辛巳五月十三日宇治川合戦の条の手負員の中波賀小太郎とありて
太平記よ芳賀禪可入道同息伊賀守高貞同二男駿河守同姓肥後守同岡本信濃守同清新左衛門為直寺往々ふるえりて禪可入道ハ駿州薩埵山合戦の軍功よ依り越後の守護職よ補せられしを其後貞治二年八月鎌倉の左馬頭基氏の謀らしむるに上杉民部少輔憲顯を以て越後の守護職よ替られしに上憲顯ハ薩埵山合戦ハ直義入道の味方よ尊氏將軍の第一の敵と成り不忠不義の者なりとも基氏を育りて舊好あり故なり然るに禪可入道大に憤りて降参不義の憲顯が為小忠賞思補の國を召放せりて様やあらざるに上杉と越後ありて數月合戦しつゝ禪可終に打負て守護職を奪はるゝの事なり其族郎等數多討せたり其上憲顯鎌倉の執事と成て下ア一に禪可いふ憤り子息伊賀守次男駿河守甥岡本信濃守等を遣はりて武藏野を合戦ふ及び一に基氏の大軍に駈ちて岡本討死し芳賀兄弟ハ散々小敗北を記しあり

下野國志

中山式部信直
丹治真人の姓
武藏國の丹黨より出く世々宇都宮家にて後孫ハ河内郡野沢村并ニ都賀郡下石橋村ヲ連綿トシテ今あり

去次
家下
海關

之事
孫
己
下

一族
不
悖
身
在

抽
名
徂
乘
感
入

具
足
不
見
但
在
之

芳賀家花押

刑部大輔

建高

右兵衛尉

高純

承
正
二
年
催
信
也

芳賀員高員

正
二
年

美
石
月
廿
日

中山式部

左衛門大夫

高定

伊賀守

高純

下野國第十

下石橋里長中山松兵衛所藏

櫻雲記、正平十八年北京貞治三年八月廿六日、基氏武州岩殿山より芳賀伊賀守高貞と合戦、芳賀敗軍、基氏は是を追て野州天王宿に至り、宇都宮和を乞ふ、是に於て基氏歸陣とあり、今に天王宿と云ふ、今の小山宿多し、舊く牛頭天王の社あり、然呼シカホひたり、其頃小山の城を、祇園の城と唱へり、上之条、南朝紀傳より云々

宇都宮興廢記、芳賀家、人皇第四代天武天皇の皇子、一品吉人親王九代の後裔、瀧口藏人清原高澄の男高重、花山法皇の勅、勘を蒙り、下野小配流せり、芳賀郡大内庄に住して、七世の孫次郎大夫高親が時、宇都宮宗綱の旗下と成せ、後より五世の孫、左兵衛尉高名入道禪可が時、小至り、越後の守護職、小補せり、宇都宮氏綱の後見と成て、近國小威を振ひ、鎌倉の管領基氏の計らひ、越後の守護職を召放され、武藏野より合戦、敗軍して、遂小改易せられ、其後左兵衛尉成高が時、嫡男太郎九宇都宮の外孫、下野守、前下野守明綱の家督を續ぎ、正綱と号し、下野守、小任、二男次郎三郎を以て、芳賀伊賀守高益と名乗らせ、同根の因あり、依て、兩家とも小繁昌し、京都將軍の御内書を拜受し、關東小於て、歴代

高澄一本、吉澄本作

規模あり、家筋より、當時五千貫文の分限あり、と記し、

同書、正綱の二男興綱、芳賀弥四郎と号して、芳賀の城不在、結城政朝と謀て、甥宇都宮忠綱を退け、押て、宇都宮の城主と成て、下野守に任じ、然るに一族芳賀刑部大輔高孝、同息右兵衛尉高経、并壬生中務少輔綱雄等、忠綱に無二の忠臣たり、興綱を深く悪く、叛き、猶興綱の嫡男尚綱の時、至り、逆意を企く、故小高経、同郡飛山小在り、を捕て、天文八年己亥八月、誅し、子息次郎高照、剃髪して、奥州白川に退き、十年を経り、天文十八年己酉九月廿七日、那須高資を語らひ、塩谷郡五月女坂より合戦し、尚綱を討取り、壬生綱雄と意を合せ、相摸の北条氏康、小内通し、宇都宮の城を乗取り、其以前、芳賀の城、益子勝宗の三男十郎高定、相續して在り、尚綱討死の後、幼主弥三郎を、芳賀小引取り、守り、育て、其後那須家臣千本十郎資俊を語らひ、天文廿年辛亥正月廿二日の夜、那須高資を討し、を、弘治元年乙卯三月、芳賀次郎高照を、芳賀の城より、寄て、腹切らせ、常陸の佐竹義昭を頼り、壬生綱雄を追伐し、弘治三年丁巳十二月廿三日、幼主三郎を、宇都宮の本城小歸し、入し、廣綱と名乗らせ、下野守に受領せしめ、

武家感状記
不備前の光政
朝臣の家と
芳賀内藏元
と云ふゆ

佐竹の息女を嫁て、高定、身退き、芳賀の家督、故高経の三男、三郎高継を以て相續させ、伊賀守と名のせ、其の實子六郎信高を同郡小貫郷にて少地をあたふ、小貫六郎と名のせり、云々、信高の事、父の益子系圖の末に記し、然る考合は、伊賀守高継、男子を以て依り、宇都宮廣綱の三男十郎高武を以て家督とし、其身、同郡飛山の城に引移り、云々、あり、真岡般若寺記録に、當城、天正五年丁丑、芳賀伊賀守高継の時築く古城、御前と云所なり、とあり、高武、宇都宮國綱の連枝、依りて威勢を振ひ、慶長二年、舎兄國綱の養子の事、小付て内乱を引起し、豊臣殿下の命、不背き、故に一族郎後残らば、關所と成る、真岡の西郷と云所、小潜居して、慶長十七年壬子十月廿日、四十一歳とて終り、其子息十郎高成、後年、水戸家へ召出され、芳賀左兵衛と名乗り、子孫連綿し、又御直参、芳賀市三郎と云人あり、奥州仙臺、出羽の羽黒、白川古事考、結城義永の旗下、芳賀越後守、同備中守とあり、常陸記、譚小那珂郡大子の城主、芳賀河内守とあり、

小宅三河守高真、後孫、代々同郡小宅郷に住し、慶長二年一族没収の後、藏人高良が男清左衛門高豊、民間より下り、真岡の西郷と云所、たゞ、東郷と、真岡町あり、其一類あり、小宅郷あり、高良の舎弟三左衛門貞高、常陸國坂戸の城代なり、後年水戸家へ召出され、今猶小宅三左衛門と名乗りて連綿あり、八木岡肥後守高房、後孫、代々同郡八木岡郷に在り、伊織貞家が、時、天文十四年乙巳九月、常陸國下館の城主水谷出羽入道蟠龍、同郡久下田郷石嶋原にて合戦して討死し、其子伊織貞勝、後年、御直参、召出されて、今八木岡大助と号し、連綿あり、岡本信濃守富高、後孫、宮内少輔重親、時、塩谷伯耆守孝綱の重臣と成り、其子讚岐守正親、豊臣家へ召出され、あり、委しく、上の塩谷系譜の末に記し、あり、

厚木美濃守朝高、叔父建高が叛逆を諫め、相州厚木に移住し、北条家の被官と成り、結城晴朝、小從て、芳賀郡沖村に歸住し、其男惣右衛門某、母方の苗字を續き、篠崎玄順と号し、醫を業とし、大江戸に住し、其後孫、本氏、復して、芳賀玄順とあり、

若色掃部助清水大和守真岡土佐守寺も天文天正の頃往々見え
 今太田原の家士は若色小平と云人の事清水の後ハ詳ちらん
 ついで云清原姓ハ大系圖一品舎人親王の後とありて天武天皇の
 御裔なり三代實録にも清原真人清見原天皇の後とおぼし清
 見原を中略せりれりされ清原と二字小書てもキヨハラと唱ふべき
 例あれども今ハキヨハラと唱うるありき姓氏録ハ清原真人敏達
 天皇孫百濟王後とあり是ハハヤヤリ別姓あるハ混じるべし

益子城

芳賀郡益子郷ふあり紀權守正隆ちりり築く康平年間を
 ちり那流山の麓ちりり後山の上に移りりり城跡二所あり
 益子系圖

贈後二位大納言紀吉佐美卿十五世

常陸國信太郡司紀貞頼嫡孫

○正隆

益子權守紀八郎

正頼

紀權守

正重

紀權守文治五年奥州征伐之刺頭武功

女子

栗田左少將藤原兼仲室宇都宮宗綱母

宗重

紀權守

朝貞

紀權守

國名を以て權守と号せりいりり得ば其頃ハ木曾の中三權守兼遠
 ちり九郎判官の郎寺ふも權守兼房あるハ猥に号せりものなり

貞重

越後守

貞正

出雲守後五位下水和子巳酉
言卒七法名法雲院春山芳樹

勝直

出雲守入道市黃應永三年丙子八月十五日卒六十三法名清光院月
潤凉心

女子

横田安藝守藤原泰朝室師綱母

勝貞

紀一郎正長元年戊申四月廿八日卒六十五法名法德院直心徹晴

勝秀

紀二郎實勝直男長祿三年己卯六月廿二日卒五十八法名放光院日峯照郭

勝光

紀八郎寬正六年己酉八月十日卒五十法名聖光院月峯照影

勝家

兵部少輔應仁二年戊子三月
朔日生害廿五法名觀理道光
紀一九 應仁三年被害于時五歲

正光

筑前守入道睡虎初紀權守嘉祿二年癸酉十月廿七日卒九十法名正光院
徹參了無依兄勝家懦弱害之而為家督云

勝久

行正

紀六郎屬那須家

賢仁

大羽山地藏院住持

一本正光を勝宗として兄勝家を害其妾を奪ひ猶其子と害はると

勝宗

信濃守入道顯虎天文七年戊戌九月廿二日卒六十九

女子

横田四郎兵衛尉藤原綱邑室綱維母

安宗

宮内少輔紀四郎天正六年戊寅二月蟄居同二月十日卒六十八

勝忠

紀五郎領同郡七井郷

勝定

七井五郎

高定

紀十郎芳賀家督号
芳賀左衛門大夫

信高

小貫六郎領同郡小貫郷

家宗

宮内大輔實君島備中守平高胤二男天正十七年己丑三月廿日叛守都
宮家而討死于時六十一

東鑑云、文治五年奥州泰衡征討の条、守都宮朝綱の郎等紀權守、波賀次郎大夫等、西木戸太郎國衡を攻落し、拔群の勲功を顯し、頼朝卿の御感小預り、白旗一流つ賜り、子孫の眉目小備ふべき旨仰らる云々と云々、
太平記云、守都宮の紀清の両黨、戰場に向く命を棄つ事、塵芥イりも尚輕く、楠正成し賞し、
さて紀氏の始祖は姓氏録に、建内宿禰男紀角宿禰後也とあり、此系圖の

始り、大納言古佐美卿は公卿補任し、紀宿奈麻呂子征東將軍大納言贈後二位延曆十六年四月己未薨六十五とあり、紀氏系圖は從三位飯麻呂子古佐美とあり、日本後紀は桓武天皇延曆七年以參議紀古佐美拜征東將軍、八年夏古佐美伐奥賊師、敗績于衣川、
宇都宮興廢記は、皇子家へ八代孝元天皇の皇孫武内宿禰十五世大納言紀古佐美卿の末葉、紀郎貞頼が時、後冷泉院の勅を蒙り、始て常陸國信太の郡司と成て、下向し、其孫正隆が女を粟田少將兼仲朝臣に嫁して、宗綱をむ、宗綱は宗圓座主の猶子と成て、下野常陸兩國の守護職と成り、正隆益子の城主と成、下野に移住し、長く守都宮の旗下と成、代々主家を補佐し、今紀四郎勝宗が時、至り、四千貫餘の地を領し、芳賀と並、守都宮の羽翼と呼ぶを云々、
蟠龍軍記は、享祿四年古河公方晴氏朝臣の使者として、益子信濃入道顯庸、水谷兵部大輔勝吉と、守都宮小至り、守都宮の旗下、
そ、此使者の、同書は、天正十一年益子宮内少輔家宗、守都宮に背き、
て、水谷蟠龍と合体し、高塩伊勢守政平、羽石内藏助時政等を討ち、
笠間左衛門尉時廣と、戦ひ、

下野國誌十

宇都宮興廢記、天正十七年三月、宇都宮國綱、芳賀伊賀守、玉生美濃守等と密謀して、益子宮内少輔家宗を攻め、其所領六百町餘を没収し、その地を家宗の子孫に常陸に流罪して、久慈郡に潜居し、そのとき同郡大子の郷士小益子民部と云ふのありて、其後孫なりといふ、都て久慈郡のうちに益子氏のありて、水戸家の藩中よりあり、當國黒羽の家中にも益子某と云ふあり、無任法師の雜談集にも、宇都宮紀の黨小貫新左衛門尉と云精兵ありと云々と記し、今芳賀郡に貫郷氷室村の里正に貫新左衛門と云ふのあり、其後孫なりといふ、其の詳なり、七井五郎小貫六郎等の後孫も民間に下りて、今其所ふあり、

壬生城

都賀郡壬生驛より、寛正三年壬午十月、壬生筑後守胤業より、築く壬生氏住とし、依て當所を壬生と云、古名、上原といひ、所なり、

壬生系圖

垂仁天皇後胤
 小槻宿禰今雄苗裔壬生官務庶流
 ○胤業
 筑後守彦五郎文正二年乙丑卒七十法名龜雲道鑑号常樂寺

綱重

筑後守左衛門佐大永三年癸未卒七十六法名祐益東闇号天徹院

綱房

中務少輔弘治元年乙卯三月十七日卒七十七法名雲山良瑞号龍桂院

周長

号德雪齋甥綱雄叛宇都宮仍討之後年其子為義雄生害

資長

左衛門尉弥次郎領大門宿今云上殿村

資忠

大門圖書助弥七郎

那須城

那須郡三輪郷よりあり、從五位下那須權守資家より、築之天治二年乙巳あり。

那須系圖

大織冠鎌足公嫡流攝政兼家公五男

道長

攝政大臣号法成寺入道殿、又御堂關白母、攝津守中正女寛仁三年己未三月出家法名行覺万壽四年丁卯十二月四日薨六十二

長家

從二位權大納言母左大臣高明公女

道家

從五位下称大夫君母源高方女

資家

從五位下那須權守改名貞信七世之祖依惠平公之謚也、天治二年乙巳下向野國那須郡而号須藤

資通

刑部丞

資滿

太郎

資清

太郎属源家而平治合戦討死

宗資

太郎

資房

次郎那須武者所實、資清二男

資隆

太郎

光隆

森田太郎母、小山大掾政光妹

泰隆

佐久山次郎

幹隆

羊淵三郎

系譜云光隆以下至為隆皆源氏而属平家、餘一宗隆一人從源家故為惣領云



那須宗隆射扇的之圖

某侯所藏之屏風

縮圖於狩野守信畫

宗隆之花押

宗隆之花押 (Large stylized calligraphic character)

久隆

福原四郎

那須五郎後改資之而本家相續

資廣

小太郎實之隆男一本作周防守

之隆

那須五郎後改資之而本家相續

龍田六郎

實隆

龍田六郎

澤村七郎

滿隆

澤村七郎

義隆

堅田郎後移在興野郷号興野八郎

朝隆

稗田九郎

為隆

戶福寺十郎後移在千本郷号千本上郎

宗隆

餘一郎相續久之家名而改資隆

平家物語、宗隆扇の
的を射る条、堯、ぬき
とあ軍の場、い、あ、り
的矢射ん、い、堯、ぬき
こと云も、い、あ、り、是、れ
狩野守信の繪、い、あ、り、



系譜云、人皇八十八代高倉院御時治承四年源賴朝卿蒙平家追討院
 宣以舍弟範賴義經寺為名代相催諸國源氏引率數万軍勢入洛之刺
 宗隆屬義經於所々合戰就中於讚州八島應嚴命而射扇的譽振天
 下名輝万代為其感賞於丹波信濃若狹備中武藏五箇國賜莊園為那
 須物領其後為雜髮上洛於伏見即成院遂往生素懷云嫡子依幼少
 舍兄資之續家督以賴資為猶子賴資崇亡父靈建立祠於那須莊号
 御靈宮云々

平家物語云、源平盛衰記
 寺よそそく世の知る所なれいさしにもぞい御靈の宮、今那須郡恩田村
 あり鳥山城下より北の方にて三里餘り也。

資之

那須五郎初名之隆實、宗隆兄

賴資

肥前守余實、宗隆男從賴朝卿賜諱一字母尚都宮朝細女

光資

肥前守太郎又余一

東鑑小建久四年三月九日丙子那須太郎光助拜領下野國北条内
 一村是來月於那須野可有御野遊之間為其經營被充行之云々
 四月二日戊戌覽那須野去夜半更以後入勢子小山左衛門尉朝政宇
 都宮左衛門尉朝綱八田右衛門尉知家各依召獻千人勢子云々那須太郎
 光助奉馱餉云々光助則光資なり同嘉禎三年の条小那
 須肥前前司とあり光資あり建長八年の条小那須肥前前司とあり
 福原小太郎芦野地頭とあり

資永

育王野次郎左衛門尉

朝資

荏原三郎

廣資

味岡四郎

資家

稻澤五郎

資成 河田六郎

資家 五郎實賴資五男兄光資 無嗣子故家督 資忠 加賀權守

資藤 備前守五郎文和四年乙未三月十三日於東寺合戰討死

資方 芦野日向守芦野家相續

太平記小那須加賀權守より那須五郎等より討死をり是は資忠と資藤との父子なり資藤は足利尊氏將軍小從て東寺の合戦に武功をあらはし討死をり

資世 越後守法名西雲 資氏 刑部大輔余一

資之 美濃守余一 氏資 遠江守大膳太夫母上杉氏憲 入道禪秀女

續太平記永享十二年鎌倉持氏朝臣の乱の時上杉方より那須美濃入道同遠江守満資あり是は資之氏資の父子なり

明資 肥前守大膳大夫 資親 播磨守大膳大夫實氏資二男兄明資無嗣子故家督

女子 宇都宮下野守藤原明綱室生女子 芦名遠江守平盛詮室也

女子 結城彈正少弼藤原義永室顯頼及資永母

女子 小峯修理大夫藤原朝脩室無子

女子 沢村越後守藤原資持室資實母

白川結城系圖小七郎朝光五代の孫大藏少輔親朝の長男結城大膳大夫顯朝九代の孫彈正少弼政朝且利義尹將軍の諱の一字を賜はり義永と改む親朝の二男小峯三河守朝常七代の後孫ハ修理大夫朝脩をて朝脩ハ永正七年二月七日自害とあり小峯とハ白川の城地の名なり、

次男 永

那須太郎實結城彈正少弼藤原義永二男母那須遠江守氏資女
永正十三年丙子八月三日生害于時十八歳

女子

資永室同時自害

女子

宇都宮下野守藤原成綱室忠綱母

女子

沢村伊豫守藤原資實室資房母

次男 久

山田次郎為資永被害于時六歳

那須記大膳大夫資親ハ女子三人ありて家督を譲るべき男子ナシ

依て白川の結城彈正少弼義永の二男を智養子とせしむ是ハ元
來資親の甥なれば然る小其後永正八年男子をすけ山田次
郎資久と名つけ六歳小成なるころ資親ハ小太田原出雲守を
らひ資永をうけかみて實子資久ハ家督を續せんと謀る是ハ依
て出雲守大關伊王野芦野稻澤等を驅催し三百餘騎して福原の
城ハ押寄々々小資永ハ腹心の郎等關十郎義時密ニ福原の城を抜出
山田の城ニ忍入り乳母ハ抱へて資久を奪取て立歸り々々資永大ニ歡
びく矢倉小上く資久をさし殺し死骸を寄手の中へ投出して主
從差違ひく死しり是ハ小於て那須家の正脈ハ断絶し云々あり

資 重

沢村五郎永享乱以來與兄資之依不和分莊為上下移在鳥山于時
應永廿五年戊戌正月廿五日也

資 持

越後守五郎母佐竹右京
大夫源義俊女

資 實

伊豫守母那須大膳大夫氏資
女

資房

修理大夫右衛門大夫母那須播磨守資親女此時依本家断絶合上
下莊而為惣領

政資

壹岐守弥太郎母犬關新左衛門尉平義任女

高資

武者所太郎母岩城左京大夫平常隆女天文廿年辛亥正月廿二日於
千本資俊館生害

資胤

修理大夫初号森田次郎母太田原備前守丹治晴清女兒高資依生
害本家相續為惣領

資郡

福原彈正左衛門尉初名資安後号森田

女子

佐竹右京大夫源義重室無子

資晴

從五位下修理大夫大膳大夫法名休山母芳賀右兵衛尉清原高経女
實音野日向守資豊女之腹云々代々所領八万石餘改易知行千石云々

資景

左京大夫余童名藤五丸
母小山彈正少弼藤原秀綱

資重

美濃守母小野守政種女
寛永十九年卒所領二万三千石

那須記小永正十三年那須の正脉断絶小依く烏山の資房上下の莊を合
て惣領と成那須修理大夫と名乗々云々

同十七年庚辰八月十二日白川の結城彈正少弼義永我子資永が修羅の
鬪憤を晴と岩城下總守常隆の與力をくめ其勢都合一千五
百餘騎を馳催し上那須の浄法寺繩と云原へ押寄せり那須方
兼て期し事なれば資房父子興野長門守義忠熊田源兵衛高貞大
關新左衛門義任河合出雲守安則館野越前守直義小口若狹守重勝子
本常陸公資俊荒井駿河守政藤岡太郎左衛門實一等をくめ三百餘
騎を馳向戦ひくく敵陣より岩上弥三内藤左馬助と云々の是を關
東よりくかり鉄炮と云火矢を放しければ那須勢大に難義しなを
荏原三郎朝秀鮎々瀬源三義昌の兩人移らひ寄て彼岩上内藤を射落

一々り其上敵將白戸淡路守、大關新左衛門と討て同志賀塚備中
守、石沢新五郎と組て討死し、奥州勢も敗軍して散々
不成り引退く云々

大永元年辛巳十月十四日、岩城常隆去年白戸志賀塚を討死し、
無念と思ひ白川義永も引退り、宇都宮俊綱の加勢を以て其勢都合
五千餘騎を以て攻来て、那須の出城河合出雲守安則が守りて、河合の城を
攻落して、その下り鳥山に向ふと、河合の城を十重廿重に取圍ひ、
されども、那須家譜代の者ども必死と成て籠城し、手も攻あぐ
まて見えたる處に、宇都宮の軍師壬生徳雪齋周長が謀りて、終に
落城し及びたり、此時壬生が家臣稻葉七郎拔群の働いて討死し、
其後那須資房と岩城常隆と和睦有て、常隆の息女を、那須弥太
郎政資と嫁合て、程多く太郎高資出生し、これに兩家の無異と静ま
り云々

天文十八年己酉九月廿七日、宇都宮俊綱二千餘騎を引具し、塩谷郡
五月女坂に寄来る、是に依り、那須太郎高資、大關右衛門佐高増、
太田原山城守綱清、芦野大和守資泰、伊王野下野守資宗、千本常

小田倉と云
所、奥州南
の西南の方
に二里許
あり、黒川
の北岸

陸奥資俊、福原安藝守資則、金枝近江守義高、角田莊兵衛重利、奥野
弥四郎義國、稻澤播磨守俊吉等、三百餘騎を以て馳合せり、大軍に追立
られ坂より下へ引退き、是より成りて、大將俊綱、小高き所、馬
を引けを以て下知し、伊王野の家臣鮎瀬弥五郎實光、佐々木寄て
俊綱を射落し、宇都宮勢多く討死して、散々小敗走り、云々
此合戦一本、天文十五年五月と記し、是非あり
同廿年辛亥正月廿二日夜、千本常陸資俊謀計を企て、那須高資を己が館
小招きて討取り、是に宇都宮方より千本を語り、故ありと云、是
に於て、舎弟森田資胤、那須の惣領を續ぎたり、云々
永祿三年庚申三月廿六日、會津の芦名左京大夫盛氏、白川の結城三河守義親
と合躰し、奥州と下野との國境、小田倉と云所、に押寄せり、是に依り、上那須
の大關右衛門佐高増、芦野大和守資泰、伊王野下野守資宗、太田原山城守綱
清、稻沢播磨守俊吉、金丸肥前守、河田六郎等、馳向て戦ひ、利を失て散々
小敗軍し、云々
同九年丙寅、大關、芦野、伊王野、太田原、稻沢、金丸等、那須資胤の不興を受
て、是に小田倉合戦、不覺を取、故あり、是に依り、佐竹家、内通し、

同年八月廿四日上那須衆三百餘騎、熊田小押寄せり、佐竹常陸久義重、此舉に乗じて、那須を攻落さんと東將監政義小二千餘騎を授く。大茂木次郎義政、續谷織部等を攻落し、宇都宮廣綱、佐竹の加勢として、鳥山の西神長村の治部内山小押寄て攻戦せり。云々

同年丁卯二月十七日上那須衆鳥山の東より下境村の大崖山に出張し、佐竹の先陣南次郎左衛門尉義郷、戸村十大夫義廣、小場三河守義忠、長倉遠江守義尚、其外武茂、左衛門尉守綱、大山田彈正少弼綱胤、鳥子狩野介泰宗、横田十郎綱久、松野讚岐守篤通、石川大和守昭光、大金備後守重宣等、其勢六千五百餘騎、攻来り、那須方森田彈正左衛門資郡を大将として、大桶三河守重安、金枝近江守泰晴、熊田源兵衛高貞、岡太郎左衛門實一、高瀬大内藏親定、河合六郎安利、薄井越中守以安等、千五百餘騎、中川を渡り、必死と成て防ぎ戦ひ、十九日引退き、云々

同年四月廿日、佐竹勢五千餘騎、下境の地へ攻来り、那須方、本庄三河守盛泰が居城に出張して防戦し、其人々小久保民部少輔秋元、越前守同右京亮同豊後守金丸下総守瀧川泉藏坊等あり、上那須の大関右衛門佐伊王野次郎左衛門茂野大和守稻沢五郎左衛門福原安藝守等、四百餘騎、鳥山の北谷に押寄せり、斯の如く上那須衆佐竹小属して度々攻来り、資胤大に難義小及び、故興野弥左衛門義重計義を廻らして、資胤を諫言し、大関方参りて降参の義を勧め、小依て大関を、め上那須衆めく、歸伏して、以前の如く上下一統し、云々是より大関、法躰して安碩と名乗り、云々

天正元年癸酉正月、佐竹義重水戸の江戸但馬守重通を攻落し、夫々小田讚岐入道天庵を討亡し、常陸一國を切随ひ、其勢ひに乗じて、那須を攻め、いよいよ度々寄来り、いよいよ、雌雄いつるなり、又武茂左衛門尉守綱、松野讚岐守篤通等、元来守都宮の一族、いよいよ年来、那須と争て、合戦止期、云々

同十年壬午五月八日、那須修理大夫資晴、密に大関入道安碩、太田原備前守晴清、福原安藝守等、小命して、千本常陸、資俊、同息十郎資政、其老臣田野邊將監重之等を、鳥山の城南より瀧寺に欺寄て誅伐し、其苗跡を、茂木次郎義政に相續させ、千本大和守義隆と名乗らる。是、大関入道故あり、千本と不和と成し、依て、先年千本が高資を討し、由を、資晴に語り、ききせし、詭言なり、云々故ありとぞ。

平尚とあり
評問多し
古書不評と
平に作りし
往々あり

仍舊在久今依時者法防非種之云
自遠近及抄引自後所皆都正
今穢者皆由山以我志極者好書の
至平向者其河上梅城之事晴期
親皇法の依其自今之平執好書者
今我志充の平あり好の好者生者

多賀谷下総
守、政経と
常陸國下妻
の城主あり
結城時朝の
旗下守後
佐竹小属に

吾何事一以世世守心之万之古因京
山城守之上城山間文能祥之云之
祥

五月廿五日 濱崎 定

多賀谷下総守

那須家所藏

下野國誌十

同十年癸未二月佐竹義重五千餘騎を率いて鳥山の川原表へ寄来、
那須方、大關右衛門入道安碩、同息土佐守増親、太田原備前守晴清、芦野
大和入道意休、伊王野下野守資宗、同息下総守資信、館野越前守直重、九田
友右衛門正信、興野尾張守義重、築瀬半兵衛宗武、益子紀六郎行正、薄井越中
守以安、稻沢五郎佐久山四郎高瀬、大内藏浄法寺中務大桶三郎河合大膳
等五百餘騎、其外茂木次郎義政が勢八十騎あり、喜連川の塩谷安房守
孝信が勢八十餘騎、狩野百村の野武士ども五百餘人馳加わり、
と防ぎ戦ひ、いづれに佐竹勢も左右あぐり攻め、引退きしと云々
同十二年甲申、川崎の塩谷伯耆守義孝、喜連川の塩谷安房守孝信と
攻め、安房守、元来義孝の舎弟なりとも大關安碩が娘を嫁せり
故小兄義孝小背きて那須に属し、いづれになり、是より依り、宇都宮國綱
も義孝の後詰として出張し、いづれに那須資晴も安房守を援へんと出陣
し、いづれに跡より佐竹義重襲ひ来り、故小引返り、依り喜連川落城し、安
房守、佐久山へ落行たり、故小伯耆守が手勢喜連川の城に入替りたり、
同十三年乙酉三月、那須資晴、大關入道安碩と謀り、塩谷伯耆守義
綱が川崎の城を攻落し、喜連川を取返さんと、塩谷安房守孝信と

先陣として、其勢三百餘騎、塩谷郡薄葉が原へ發向ひ、是を聞くと山田筑後守
業辰、岡本對馬守氏宗等、手勢百餘騎許り、馳向ひ戦ひ、いづれに忽ち攻破れ
り、いづれに兩人とも討死し、いづれに宇都宮國綱も後詰として、紀清、兩黨三千餘騎
壬生上総次義雄が勢二百餘騎を引率して出陣し、いづれに先陣平塚弥十郎
為貞、麻生弥吉郎家忠等、塩谷安房守を馳破り、討死し、いづれに宮勢
散々小敗軍し、國綱も多勢の中より取圍んで、既小危り、いづれに茂垂修理亮
保正、主従十六騎、取返して討死し、いづれに壬生勢踏まわり、防ぎ戦ひ、
國綱漸く、いづれに虎口を退き、引揚りたり、

東國擾乱記、那須修理大夫資晴、天正十三年乙酉三月、宇都宮國綱、
塩谷郡薄葉が原へ合戦し、國綱も多勢を破り、勢ひも乘り、いづれに孤川、
宿寺大小の城五六ヶ所攻取り、近隣小威を振ひ、いづれに處小同、いづれに庚寅三月、
豊臣大閤秀吉公相州小田原の北条を御征伐として、御出陣在り、
東國の大小名御陣を馳集り、いづれに是より依り、いづれに那須が族家人
等も、いづれに同く小田原へ參上して、御動坐の儀を賀し、奉り北条既、
て殿下奥州を征伐せんと、同八月十五日下野、いづれに下野、いづれに小山、
給ふ、いづれに及で、資晴より、いづれに見參り、いづれに殿下資晴が、いづれに遅參を怒り、いづれに給ひ、いづれに那須

が本領をもくく彼一族家人等よりけあえく資晴より福原の地を
を賜ふと云々と記しあり

大関右衛門佐丹治高増

黒羽一万余石余

太田原備前守丹治晴清

太田原一万石余

福原安藝守藤原資孝

佐久山三千五百石

千本大和守藤原義貴

千本千五百石

蘆野日向守藤原盛泰

芦野三千六百石

伊王野下総守藤原資信

伊王野二千七百石改易

那須修理大夫藤原資晴

鳥六万石改易千石

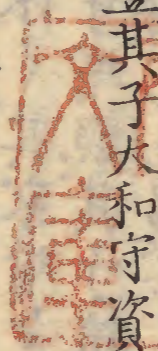
以上那須七騎ト云

武徳安民記卷五下野國那須七騎、太田原備前守晴清、伊王野下総守資信、
大関左衛門佐資増、千本大和守福原安藝守、芦野民部少輔岡本下野守、
記しあり、此中に岡本を加へ、非なり、最其頃岡本宮内少輔義保と
云ふあり、太田原福原等と共に豊臣殿下に謁はれ、岡本、元来宇都
宮家の被官、那須の旗下、はるばる其頃岡本下野守と聞えり、
織田の家臣、神戸信孝朝臣の附人なり、後石田三成に同心して滅亡し、
及び北畠軍記より、尾張國熱田宮の社司より出、岡本か

て當國の岡本氏、芳賀禪可入道の舎弟富高河内郡岡本郷を領して、
岡本信濃守と号し、其後孫、清黨たるに混じるべし

大関太田原の両家、継志録、太田原備前守丹治忠清十三代同備前守資
清入道永存の長男高増、大関肥後守高清十二代弥五郎増次滅亡小
依、其家督を相續し、大関右衛門佐と号し、後入道安碩と云、其子土佐
守増親、其子信濃守増榮、其子民部増茂、早世、依て其子増恒家
督して信濃守と云ふ、永存の二男、太田原山城守綱清、其子備前守
晴清入道永全、其子備前守政清、其子山城守高清とあり、其先、武藏國
丹黨より出、丹治比真人の姓なり、世々那須家の羽翼、武功の家筋
なり、但し大関氏、やと平姓、常陸國小栗御厨、庄大関郷より出り、
伊王野、那須と一資隆の男、肥前守頼資、二男、次郎左衛門尉資永、
以来代々伊王野に住して下野守資宗の男、下総守資信、其子又十郎
資重、早世、依り、二男、又次郎資朝、相續し、豊後守と云、資朝女二人
あり、長女、井上新左衛門の男、數馬を聳養子として相續し、
世々、故改易せられ、家名の、残る、次女、千本大和守義貴
の室とあり、又十郎資重の男、又六郎資直、浪人と成て、後、太田原家の

臣下とあり、伊王野五郎左衛門と名のり、子孫連綿して、
 福原、周防守資廣以来代々福原に住して、彈正左衛門尉資郡、那須
 資胤の弟あり、男子をよき小依、太田原晴清の三男を養子として、安
 藝守資孝と云、其子中務丞資廣子多き故、弟資保を家督として、雅樂
 頭と云、其子資盛、淡路守と云、其子資敏、内記と云、
 千本十郎為隆、後孫、常陸、資俊、至、断絶、其名跡、茂木次郎義
 政相續して、千本大和守義隆と名乗、後自ら義貴と改む、其子大和守義
 定、其子大和守義等、早世、依、舎弟、又七郎資吉相續して、兵右衛門と云、
 茂木次郎、八田右衛門尉知家の三男、茂木三郎知基、末孫あり、
 芦野、那須加賀權守資忠の三男、芦野日向守資方、後孫、近代日向守資
 豊、其子大和守資泰、入道、以休、其子日向守盛、泰、其子弥左衛門政泰と云、



下野國誌十之卷終

足利 梅溪田崎明義畫
 北越 竹邨遠藤順信書

